

Title	sister's daughter婚ノート
Author(s)	甲田, 和衛
Citation	年報人間科学. 1980, 1, p. 1-8
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/4768
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

sister's daughter 婚ノート

甲 田 和 衛

*Quand fallait-il voir l'Inde, à quelle époque l'a letude
des sauvages brésiliens pouvait-elle apporter la satis-
faction la plus pure, le faire connaître sous la forme la
moins altérée?*

Levi-Strauss, Tristes tropiques.

はじめに

私がZD (sister's daughter) 婚にフィールドで、はじめて遭遇したのは、'66年、Mysoreである。すでにSrinivas (1942) にまつて、ZD婚を頭に描いてはいたが、ZD婚の系譜作成の作業は、ある驚異を伴っていた。暑さは凌げ、飢えには耐えられても、渴きだけは癒しがたいと体験したのもこの時のことである。その暑さと、通訳を介しての面接の疲れも忘れ、何度か系譜図の描き直しに没頭、完成した時の、南インドも三月の爽やかな朝の興奮は、いまでも忘れない。翌'67年、Guntur 調査を経て「Canarese 村落における sister's daughter marriage」(甲田 1972, 111-133) と「Andhra Pradesh の

ヒンドゥ村落」(甲田 1972, 135-155) を公表した。前者ではZD婚をめぐる'50年代の文献、McCormack (1958) と Dumont (1953, 1957) にあるかわる Dravidian kinship terminology をめぐる研究小史を、後者は actual kin にあるZD = MB D = FZSD = …… 婚とそれが近親婚のうち一定の割合をもつ問題を扱った。

'73年 Godavari '75年 Vishakapatnam の両調査を Rao (1973) の協力をえて実施し、その後 Beck (1972) と Carter (1974) を参照し、その結果の一部を公刊した (Koda & Rao 1977, 甲田 '1978)。本ノートは、現在報告書準備中の両調査のうち、とくにZD婚をめぐる問題の前記 Mysore 報告 (甲田 '1972) の続編である。Godavari は、インドを南北に分けるといわれる Godavari 河の北辺のフィールドである。どの家族を訪れても、辿っていかば、みいだされるのはイトコ婚とともにZD婚である。Rivers (1907) 以来今日にいたるまでイトコ婚のみが重視されて、南インド固有のZD婚に言及されていることはきわめて稀である。すでにインドでは、'55年、The Hindu Marriage Act にあつて、他の近親よりも先にZDをよとして4

種の第一インポートの婚姻を禁止する。しかし、つぎの但し書きをもつて“……, unless the custom or usage governing each of them (the parties) permits of a marriage between the two.”私は「インド家族立法発展年表」(黒木、1966、174-178)を思い浮べながら、法社会学者は「この“custom”という一字に橋かけているのだろうか」という感慨にとらわれざるをえなかった。

このことは法社会学者にかぎらな。道伝学者 Sanghvi (1966) は Andhra Pradesh の muslim community の ND 婚と cross-cousin 婚のみがみいだされることを述べた。 “The local custom of consanguineous marriage in Andhra Pradesh had deeper roots than could be modified by the religious influence that came there at a later stage” (312)。この custom は宗教の影響を越えることが出来る、といえるだろうか。もともと南と北のインドにおける Brahman の歴史の対比は、古くは Slater (1924) から最近でも Ghurje (1972) にわたって主張されてくる。それらは広く “Aryan-Davidian Dichotomy” とし、南インドにおける母系制の残存、あるいは kinship exogamy と clan exogamy とどう典型的な解釈を生み、 Held (1935) は Hindustan と Deccan の mythical division を否定しながら、南北インドの社会組織の差異を指摘する結果に終わっている。ZD 婚は幼児婚と同じくインドの Minotaur (Rathbone 1934) ののだろうか。

ZD 婚をふくむ、いわゆる oblique marriage は、ほかに FN、MZ、そして BD 婚があり、これら4種類の婚姻事例は、なお現在も

みいだされていることは、Murdock (1949) の Table 80 を一瞥するだけで充分である。これら4種の oblique marriage のうち、FN と MN との性関係が禁じられて、BD と ND との性関係が言及されていない——禁止されていない——レビ記 18 の記述は、よく知られている。ユダヤ人はその姪との婚姻が自由であり、その婚姻は称賛されるべきものとされていた。しかし、FN と MN との婚姻の禁止については、カンタベリー大司教委員会報告 (Report, 1940) はこれをよびに解説する。 “Respect for age is a stronger determinant of these Levitical prohibitions, and stronger still is the necessity of obedience of a wife to a husband. Thus a man marry his niece, because an uncle he could claim respect and sometimes obedience from her, and husband he claims reverence and constant obedience. But a man may not marry his aunt, because she has a right to respect from him as belonging to the older generation which is incompatible with the subservience she ought to show as his wife.” (25) FN や MN 婚の禁止には、年令や上の世代への畏敬が作用しているだろう。しかし BN や ZD 婚の禁止の強化には、宗教改革を経て、cousin 婚の許容という条件が働いていることもまた歴史のしめすとおりである。

私どもは、これら4種の oblique marriage のうち、どのように FN、MZ 婚が禁止され、BD、ZD 婚が残存し、とくに私のフィールドとする南インドに ZD 婚がいまも一般に選好されている、という歴史をあきらかにすることが出来るだろうか。uncle-niece 婚は、

progress." (435) 41. McLennan の結論 "The order of social development, in our view, is then, that the tribe stands first, the gens or house next, and last of all, the family." (111) を受けつけないからである。McLennan の位置の逆転は私にとっては望ましい。なぜならば、caste の sub-caste 化のプロセスの歴史的再構成は不可能と考えるものについては、McLennan のように tribe, gens, family の順序で考へてはならぬ、とどう保証はないからである。Morgan がつねに McLennan にたいして "facts" にしたがって overtrump であつたにすぎない (Maret 1936, 180) と云ふことと関係しない。

いま歴史的再構成をアイヌの婚姻事例から考へてみよう。アイヌにオジ・メイ婚がおこなわれていたことは、古くから知られている。「(1)甥は父方の叔母との結婚は許されるが、母方の叔母との結婚は禁止されている。(2)姪は父方の叔父との結婚を許されるが、母方の叔父との結婚は禁止されている」(杉浦 1951, 208)。つまり FZ と BD 婚は許されるが、MZ と ZD 婚は禁止される、と杉浦は指摘した。そして、「結婚を禁止された人々……これを拡大すれば母系 lineage になる筈で」、「もし歴史的な研究が出来たら、母系 lineage の存在が一層明確になったかも知れない。」(210)と述べた。しかし名取調査(名取 1943)では、MZ 婚は禁止されるが、FZ、BD、そして ZD 婚が許されており、布村調査(布村 1960)では、ZD 婚は「できるはずだが実例を知らない」(9)と確認されている。ZD 婚が許容されたかどうかは、杉浦の母系 lineage にとって決定的である。そして名取の「沙流川筋通婚表」は貴重なデータではあるが、

意味不明であり、すでに今後この表の再構成の機会はもてそうもない。「叔父・姪の結婚はむしろあつて」(瀬川 1972, 64)と云つたアイヌの婚姻の再構成は容易なことではない。

かりに個々の民族誌のデータがより正確なものであつたとしても、Murdock 流の統計的技法によつて、歴史的再構成を試みることは無意味である。歴史的再構成とは、先行する社会からの survivals あるいは一つの社会組織の他への転換を説明しようとするものである。ZD 婚はたしかに MBD 婚と関係する。なぜならば、McCor-mack (1958) 以来 Moore (1963)、Lave (1966)、Rivière (1966)、甲田 (1972) と、ZD 婚が世代を重ねて継起すれば、ZD || MBD || FZSD || FMBSD || ……となるからである。ただし、この ZD exchange は極端なばあい、MMBD || FZDDD となる (Hart 1965:41)。これが一つのルールであることはいいがたい。だからといって、ZD 婚と MBD 婚を切離して、南インドの婚姻のうち、もっとも一般的な重要なタイプは cross-cousin 婚であり、ついで ZD 婚である (Banerjee, 1966:84-85) と云ふこともできない。ZD 婚は母系制の survivals あるいは母系制から父系制への転換によつて説明できるだろうか。

locality

日本古代の「いわゆる近親結婚と母系的族外婚」を分析して、洞はつぎのように結論する。「これらの規制で一見奇異に感ずることは、兄弟姉妹・叔伯姪間の婚姻が、同母・異母、母方・父方を問わ

ず禁忌となっていないことである。……津田博士の言われるごとく、『父方の近親と結婚することが普通であった母系時代の慣習が残っているところへ、母方の近親と結婚し得る父系時代の新習慣も行われて、其二つが共存し、終にそれが混同し』（津田左右吉「古事記及び日本書記の新研究」316）てしまったものであろう。……父系制が一般化したのは大化改新以後のことである。しかも、それによって父系的族外婚の規制は発生しなかった。かくて母系・父系を問わず、近親間の婚姻は禁忌されなくなってしまうわけである。（洞、1959, 262—3）

日本に族外婚も近親婚禁忌の規制も欠いていることを云々する資格は私にない。ただ一例のみとりあげたい。洞によって「母権社会があったと考える方がよいという考え方に今は変わっている」（有賀、1968, 4）有賀の立場である。「母系制を確証する資料はなく、父系制の方がはるかに確実であるから、……上代のよばいも、母系制とそれに伴う招婿婚との存在が証明できないとすれば、それは近世の意味の智入りと同じ意味を持つ風俗であると見る方がより確実である。しかしこれは証明されねばならない。」〔25〕この証明が問題である。有賀の婚姻史のエッセンスは、「そこで親方取婚をよく見るなら、……それゆえこれにはヨバイ婚が未分化の形で含まれている。これはその基盤が村内婚であったからであるが、凝集した形の村内婚であることが、親方取婚に現われていた。それゆえこの凝集した形が同族間の変化によって解けて来ると、それは智入婚の成立する地盤に転換したのである。」〔325〕にあると思う。

有賀の婚姻類型、凝集した形の村内婚と親方取婚、村内婚と智取婚、村外婚と嫁取婚という三類型は相互規定し、相互転換の可能性をもつ。ただしこの相互転換は「一民族文化圏内」に限られ「この限度外においては（すなわち他の民族文化圏に対しては）諸類型の相互転換の互能性はない。」〔355〕。有賀の類型論は、たとえ「かくて現実の社会関係は典型と類型との相互媒介において存在する」〔356〕としても、(1) Conklin [1964:41] の人類学における“type”の使用の三つ(多義性 i) paragon, ii) attribute combination (typology), iii) taxon (paradigm) を明確にすることはできず、Conklin からすれば、有賀の類型は“typology”でも“paradigm”でもなく“key”に過ぎないということが出来る。(2) さらに凝集した形の村内婚と凝集していかない村内婚と、そして村外婚、いずれもなにほどの近親婚をふくむはずである。二つの村内婚と村外婚における近親婚の率の変化は、「同族間の変化」によって影響をうけるのか、あるいは逆に「同族間の変化」が近親婚の率を規定するのか、いずれにせよ、それは「証明されなければならない」ことではないだろうか。

ここではとくに(2)を問題としたい。なぜならば私のとりあげているZD婚は、第一にカースト、細分化された村の sub-caste においても、それは *endogamous* のゆえに、村内婚・村外婚から自由である。そして第二に、ZD婚それ自身、近親婚ではあるが *preferred marriage* であるからである。まずZD婚の率である。Guntur [甲田、1972, 145] で近親婚のうちZD婚は二一・二%、Godavari (甲田、報告書準備中) で一九・八%、ほぼ全近親婚のうち二〇%がZD婚である。

このZD婚をよりアブローチするかによって二分される。(1)ZD
 ||MBD||FZSD||……か、あるいは(2)ZD#MBDである。第
 一の立場にたつて、ZD||MBD||……婚のZD婚全体からの率を
 みれば、Gunter [149]の三四・五%、Gadavariの二一・一%となる。
 このアブローチを進めることは、初婚年令、出生死亡率、年令別婚
 姻率、夫婦の年令差などによる人口学的simulationモデルに於ける
 ことになる。しかしこのアブローチは、Gilbert & Hammel [1966]
 Hammel & Hutchinson [1974]のようにZD婚はtabooとして取扱
 われ、またカースト別集団、あるいはカースト化をどう考えるか
 という大きな困難にふさがれる。

この人口学的アブローチに先立って、Burkhardt [1978]はなにも
 りもZD婚の率それ自体のデータ収集の可能性を問題とする。ter-
 minological kinの問題もあることながら、Burkhardtは系譜的方法の
 限界、系譜収集のはた同一の深さを——ZD婚の二世代にわたる
 oblique marriageとその世代の定義を加えて——疑問とせざるをえ
 なく指摘する [185]。この指摘は正しい。そしてBurkhardtは
 preferred marriageとintravillage marriageは関係がなから(ただし
 この場合はnon-Brahman groupが対象村落)にもかかわらず、南インド村
 落におけるcaste dominanceのstructural baseとしての“local cir-
 cle”を提唱する。たしかにKarve [1965]のendogamous circles
 あるいは“clan”、あるいはYalman [1967]の“micro-caste”をより明
 らかにするものとする。しかしpreferred marriageとintravillage
 marriageとがEpstein [1962]の分析と関係があり、私にGuntur

ではnon-Brahmanでは関係があるが、Brahman groupは関係しな
 い。そしてGodavariではnon-Brahmanのみ村内婚と関係がある。
 Burkhardtの“relevant locality”の強調はなお今後の課題である。

ZD婚の第二のアブローチにはZD#MBD、Rao [1973]があ
 る。ZD||menakodaluとMBD||maradaluは、二つの異なった
 parallelとcrossのrelativeであり、二つの異なった世代のゆえに、Z
 D#MBDである。それは“local culture”の問題である。にもかか
 わらず、ZD婚とMBD婚が並存するのは、rankの問題であり、low
 ranking lineageはZD、high ranking lineageはMBDの婚姻をする
 からである、と指摘する。この場合はカーストのrankingが入って
 くる。しかしZD#MBDの指摘は重要である。ただしこの場合は、pa-
 rallelとcrossのkinの分類の前に、terminologicalとactualのkin、
 それも固有のDravidian kinship terminologyの問題が残されて
 くる。

ZD||MBD||……は、ZD#MBDにせよ、それぞれ“lo-
 cality”の強調は、私にこのtype marriageの説明にclanを指定した
 Radcliffe-Brown [1930]を思ひ起させる。なぜならば、ZD||M
 BDであれば、“local circle”はこのcoreとして、権力をこのunit
 fictionとしてのkinshipとなり、ZD#MBDならばlocal culture
 の問題として、Radcliffe-Brownが後に [1952] tabooを扱って、儀
 礼的行動の研究は、このシンボルと意味の研究に移らざるをえな
 らぬを述べるからである。そして、ritual purity, ultimate origin of
 purity, pure womenを指定したところ、これはYalman [1967]

③ 言葉は正確である。"Thus, a sister's daughter marriage, far from being antithetical to cross-cousin marriage, appears as a superb logical extension of the principles inherent in cross-cousin marriage." (351)。この婚が非生存の生存をなす。その意味で symbol system の研究を興へし種々の社会的現象を同様に、かくある computer simulation に提供可能なデータを収集しめるかあるか、あるべきか否かをたねた。現在おぼしき知りえたデータは (1) Brahman の preferred marriage であるが、村外婚である。(2) non-Brahman の結婚は、その村外婚が、高率であり、村内婚である。(3) locality group への non-Brahman が権力をもち、これに Majumdar [1926] の "pseudo-Rajput" と Srinivas [1952] の 言葉を借して、これを "pseudo-Brahmanization" とするべきである。

引用文献

有賀喜年筆記' 1968' 「婚姻・労働・若者」著作集 VI
 Banerjee, B. 1966 Marriage and Kinship of the Gangadikara
 Vokkaligas of Mysore.
 Beck, B. E. F. 1972 Peasant Society in Konku.
 Burkhardt, G. 1978 Marriage Alliance and the Local Circle among
 some Udayars of South India, in American Studies in an Anth-
 ropology of India, ed. by S. Vatuk, 173-210
 Carter, A. T. 1974 A Comparative Analysis of Kinship and
 Marriage in South Asia, Proceedings of RAI for 1973, 29-54.

Conklin, H. C. 1964 Ethnogenetical Method, in Explorations
 in Cultural Anthropology, ed. by W. H. Goodenough, 25-55.
 Dumont, L. 1953 The Dravidian Kinship Terminology as an
 Expression of Marriage, Man 54, 34-39.
 Dumont, L. 1975 Hierarchy and Marriage Alliance in South
 Indian Kinship, RAI Occasional Papers, No.12.
 Epstein, T. S. Economic Development and Social Change in
 South India.
 Firth, R. et al. 1969 Families and their Relatives.
 Ghurye, G. S. 1972 Two Brahmanical Institutions, Gotra and
 Charana.
 Gilbert, J. P. & E. A. Hammel 1966 Computer Analysis of
 Problems in Kinship and Social Structure, AA, 68, 71-93.
 Hammel, E. A. & D. Hutchinson 1974 Two Tests of Computer
 Micro-simulation: The Effect of an Incest Tabu on Population
 Viability, and The Effect of Age Differences between Spouses on
 the Skewing of Consanguineal Relationships between Them, in
 Computer Simulation in Human Population Studies, ed. by B.
 Duke & J. W. MacCleuer, 1-14.
 Held, G. J. 1935 The Mahābhārata, an Ethnological Study.
 Hiatt, L. R. 1965 Kinship and Conflict.
 原 徳雄 1959 「日本母権制社会の成立」新版
 婦学雑誌(鎌) 1973 「原始前期社会の成立」第一巻「婚姻論」。
 Karve, I. 1953 Kinship Organization in India.
 Koda, K. & M. K. Rao 1977 Marriage Regulations in South
 India-Cultivator, Fisherman & Tribe of Andhra Pradesh. (mimeo-
 graphed)
 甲田和衛 1972 「インドの婚姻規制」大阪大学文学部記要 xvi, 57
 -160.

- 中田和徳 1978 「カーヌト論序説」今西總一郎博士追記念論集
 「社会科学人類学」7-21
 黒木三郎 1966 「婚姻法の近代化」
 Lave, J. C. 1966 A Formal Analysis of Preferential Marriage
 with the Sister's Daughter, Man, 1, 184-200
 Majumdar, D. N. 1926 Pseudo-Rajputs, Man in India, vi, 155 -
 173
 Marett, R. R. 1936 Tylor.
 McCormack, W. 1958 Sister's Daughter Marriage in a Mysore
 Village, Man in India xxxviii, 34-48
 McLennan, J. F. 1970 Primitive Marriage (1st ed. 1865)
 三沢米雄 1890 「日本十七世紀婚姻法史論」東京人類学雑誌V, 44,
 9-17 46, 65-71, 47, 117-122.
 Moore, S. F. 1963 Oblique and Asymmetrical Cross-Cousin
 Marriage and Crow-Omaha Terminology, AA, XLV, 296-311.
 Morgan, L. H. 1964 Ancient Society (1st ed. 1877).
 Murdock, G. P. 1949 Social Structure.
 各原啓祐 1943 「筑前川筋ヘイヌの家紋と婚姻」民族学研究
 第1, 1-11.
 布村一夫 1960 「世々の結婚—異邦の嫁と「社会組織」民族学研究
 XXIV, 234-248
 大岡英徳川 1967 「婚姻の民族学」
 Radcliffe-Brown, A. R. 1930 The Social Organization of Aus-
 tralian Tribes, Oceania Monograph, No. 1.
 Radcliffe-Brown, A. R. 1952 Structure and Function in Pri-
 mitive Society.
 Rathbone, E. F. 1934 Child Marriage: The Indian Minotaur.
 The Report of a Commission appointed by His Grace the Arch-
 bishop of Canterbury 1940 Kindred and Affinity as Impediments
 to Marriage.
 Rivers, W. H. R. 1907 The Marriage of Cousins in India, Journal
 of the Royal Asiatic Society, 611-640.
 Rivière, P. G. 1966 Oblique Discontinuous Exchange: A New
 Formal Type of Prescriptive Alliance, AA, XLVIII, 738-740.
 Sanghvi, L. D. 1966 Genetic Adaptation in Man, in The Biology
 of Human Adaptability, ed. by Baker, P. T., Weiner, J. S., 305 -
 328.
 藤川龍十 1972 「ヘイヌの婚姻」
 Slater 1924 The Dravidian Element in Indian Culture.
 Srinivas, M. N. 1942 Marriage and Family in Mysore.
 Srinivas, M. N. 1952 Religion and Society among the Coorgs of
 South India.
 杉浦健一 1951 「筑前ヘイヌの親族組織」民族学研究 XVII, 187 -
 212
 Yalman, N. 1967 Under the Bo Tree.
 柳田國男(譯) 1951 「民族学辞典」